

# 落語の種

## ① 落語の源流

- 1628年(寛永5) 安楽庵策伝\*1が「醒睡笑」\*2を板倉重宗に献呈  
1673年(延宝1) 露の五郎兵衛(京都)、米沢彦八(大坂)、鹿野武左衛門(江戸)らが辻噺を始める  
1688年(元禄1) 鹿野武左衛門が流罪となる  
1786年(天明6) 烏亭焉馬\*3が「咄の会」を開催  
1791年(寛政3) 岡本万作が日本橋橋町の駕籠(かご)屋の二階で寄席興行  
1798年(寛政10) 三笑亭可楽が江戸の下谷稲荷で、桂文治が大坂の座摩神社で寄席興行  
1804年(文化1) 三笑亭可楽が下谷孔雀茶屋で三題噺を試みる

\*1 安楽庵策伝(1554~1642)は諱(いみな)を日快と言ひ、浄土宗西山派の僧にして、初代飛騨高山城主である金森長近の実弟。茶人としても有名で、古田織部を師とし、松花堂昭乗らとも親交があった。織部は秀吉の御咄衆でもあった。

\*2 「醒睡笑」は1623年(元和9)に著された、全八巻からなる笑話集で、千を越える咄が収録されている。僧日快(策伝)にとっては、説教のネタ本であったが、「落とし咄」の形態をとっていることから、策伝は落語の祖とされている。

\*3 烏亭焉馬(1743~1822)は大工の棟梁の息子で、戯作者。立川焉馬(えんば)とも名乗り、俳諧や狂歌を嗜んだ。焉馬の主宰する「咄の会」には式亭三馬や山東京伝、また三笑亭可楽や三遊亭圓生らも参加していた。



## ② 寄席の変遷

1700年頃 露の五郎兵衛(1643~1703)が京の四条河原で辻噺を始める。米沢彦八(?~1714)が大坂の生國玉神社(いくくにたまじんじゃ)境内で、小屋掛けの辻噺を行う。鹿野武左衛門(1649~1699)が江戸で座敷噺で評判をとる。なお1693年(元禄6)に江戸で伝染病が発生し、1万数千人以上が死亡した際、南天と梅干の実が良く効くという風評が広がり、めぐりめぐって鹿野はこの事件に連座して召し捕られた。

江戸の寄席興行創始者は、大坂出身の落語家岡本万作で、1791年(寛政3)日本橋橋町の駕籠屋の二階で夜興行をし、98年、神田豊島町薬店(わらだな)に看板を掲げ、辻々にピラを貼って客を招いた。同年、初代三笑亭可楽(1777~1833)が、台東区下谷神社境内で5日間寄席興行を行った。また大坂では初代桂文治が(1773~1815)座摩(ざま)社内で寄席興行を開催した。

文化文政期(1804~1830)には、江戸での寄席の数は225軒にも及ぶ。朝寝坊むらく、林屋(家)正蔵、三遊亭圓生、船遊(入船)亭扇橋とその弟子で都々逸坊扇歌など職業落語家が生まれる。

### ③ 落語の熟成期

幕末から明治にかけて活躍した三遊亭圓朝は、落語中興の祖と呼ばれる。しかし音曲師だった父親は、いわば放蕩芸人で、圓朝は実生活では幼少のころから大変苦勞したといわれる。

圓朝は「三題噺」とともに鳴り物や大道具を使った「芝居噺」も得意としていたが、明治新政府が「演芸類似興行禁止令」を出すなど危機感を感じ、「扇一本、舌三寸」の素噺で勝負に出た。

圓朝以外にも「ステテコ踊り」の初代三遊亭圓遊、「ラッパ」の四代目橘家圓太郎、「へらへら」の初代三遊亭萬橋、「釜掘り」の初代立川談志といった「珍芸四天王」も活躍した。

人情噺を中心とした「三遊派」と滑稽話を中心にした「柳派」の二派に分かれ、互いに闘ぎあうようになる。寄席の興行も月の上席(前半)と下席(後半)を両派で分け合って勤めるようになっていた。

明治38年(1905年)に出来た「落語研究会」は三遊と柳の両派を跨ぐもので、1. 落語古来の伝統を守ること、2. 時代に合わせた新作の奨励、3. 若手の育成、4. 寄席興行の改革の四つを目標とした。中心となったのは初代三遊亭圓左で、その他四代目橘家圓喬、初代三遊亭圓右、二代目三遊亭小圓朝、四代目橘家圓蔵、三代目柳家小さんと実力者だったので、落語通が大勢詰めかけた。

一方上方では、初代文枝は「三十石」などで人気を博し、門下の初代桂文之助(のち2代目曾呂利新左衛門)、2代目桂文都(のち2代目月亭文都)、初代桂文三(のち2代目桂文枝、晩年桂文左衛門)、初代桂文團治も人気・実力ともに高く、「四天王」と称された。



### ④ 落語家の亭号

江戸落語(烏亭焉馬をもって亭号の嚆矢とする)

三遊亭 古今亭 柳家 桂 林家 立川 入船亭 春風亭 柳亭 金原亭 橘家  
五街道 隅田川 三笑亭 朝寝坊 快樂亭 昔昔亭 などがある。

亭号は代々継承され、一門の弟子は同じ亭号を名乗るのが通例だが、例外も多く、一概には言えない。そもそも焉馬の弟子が「三遊亭」を名乗り、焉馬自身も後年「立川」に改名している。三遊亭圓朝は二代目三遊亭圓生の弟子となり、初め橘家小圓太と名乗った。父親も二代目圓生門下で橘家圓太郎と名乗っていた。2代目三遊亭圓生は、門下の初代立花屋圓蔵が継ぎ、門下にいた初代古今亭志ん生、初代金原亭馬生、初代司馬龍生らは独立しそれぞれの一門を開くことになる。

柳家は三遊亭に比べて結束は強いと言えるが、亭号としては後発で、江戸後期に活躍した初代麗々亭柳嬌の「柳」から生まれた。その弟子が春風亭柳枝、そしてその弟子に至ってはじめて初代柳亭燕枝という亭号となった。「柳家」という亭号はさらにあとで、二代目柳家小さんからということになる。

桂はもともとは上方の初代桂文治(1773~1815)から始まった。その娘婿の三代目文治(?~1857)がもともと江戸出身だったため、江戸に移ってから、桂文治の名前が東京でも継承されることとなった。「黒門町」と称される八代目桂文楽(1892~1971)は、初代桂小南(1880~1947)に入門し、内弟子として浅草の小南宅に住み込んだが、稽古は三代目三遊亭圓馬につけてもらった。8代目文楽は東京時代の初代桂小南の唯一の弟子である。8代目文楽は内弟子として入門し、浅草にある初代小南宅に住み込んだ。初代小南は自身が上方の落語家であるため、この新しい弟子に稽古をつけることはなかった。8代目文楽は3代

目三遊亭圓馬に稽古を付けてもらうことになる。3代目圓馬は、ネタ数の多さで有名で、その中には東京・大阪の演目が幅広く含まれる。食べ方一つで羊羹の銘柄を描き分け、また豆を食べるのも枝豆、そら豆、甘納豆それぞれの違いをはっきりと表現し、8代目文楽を驚かせた。

### 上方落語

桂 笑福亭 露の 林家 月亭 など

桂は東京にも上方にも存在する亭号だが、もともと大坂に住んでいた三代目文治が1827年ころに江戸に戻ってからは、上方でも独自に三代目文治を作ることになった。現在は桂は上方の亭号の七割を占めるに至っている。幕末から明治にかけて上方落語の代表的存在という初代桂文枝の名が挙げられる。三代目桂文治の弟子で、名人と呼ばれていた。十八番ネタの『三十石』を質入れして、質受けするまでは、いくらお客から注文されても決して高座で演じなかったという伝説を残している。

笑福亭の祖は松富久亭松竹(しょうふくていしよちく)が始まりという説があるが、2代目以降、松富久亭から笑福亭に改められた。戦後、上方落語は滅亡したと言われるほど衰退するが、6代目笑福亭松鶴(しよかく)や3代目林家染丸(そめまる)らが復興に尽力。

## ⑤ 噺の分類

滑稽噺 寿限無 垂乳根 目黒のさんま 粗忽長屋 あたま山 など  
人情噺 芝浜 子別れ 富久 火事息子 ねずみ 厩火事 など  
怪談噺 怪談牡丹灯籠 真景累ヶ淵 もう半分 死神 猫怪談 など  
芝居噺 七段目 中村仲蔵 淀五郎 四段目 蛙茶番 豊竹屋 など  
廓噺 三枚起請 文違い 五人廻し 品川心中 居残り佐平次 など

あたま山 けちな男がサクランボの種を飲み込んだところ、それが腹の中で芽を出す。その後もどんどん成長して、ついには頭を突き破って、一本の立派な桜の木になる。その木は春になると見事な花を咲かせ、花見の名所となるが、当人はうるさくてかなわないと、その木を頭から抜いてしまう。ところがそこに大きな穴が開き、雨水が溜まって池ができる。すると今度は大勢のひとが舟遊びに訪れる事態となり、男は世を憐んで、その池に身を投げて死んでしまう。

五人廻し 舞台は夜ふけの遊廓、吉原。売れっ子の花魁、喜瀬川は五人のお客をとったが、一人のお客の部屋に入ったっきりで、ほかの部屋を廻らない。そこで振られた男たちは不満たらたら。可哀想なのは廓の若い衆だ。「三歳から大門をくぐっている」という男からは江戸弁で啖呵を切られ、役人とおぼしき男からは軍人口調で「廓に爆弾を仕掛ける」と脅かされ、そうかと思えば妙な言葉遣いの通人からは、真綿で首を絞めるようなイヤミを言われた挙句、若い衆はようやく喜瀬川のところへ。今夜、喜瀬川がずっと相手をしているのは田舎者のお大尽で、一部始終を話すと、お大尽は「玉代を返して帰って貰え」と言い出します。そこで各人に50銭ずつ返して、帰って貰ったその後「もう50銭おくれよ」とねだります。お大尽が「おかしなことを言うな」と思いながら50銭を渡すと「あんたにも50銭返すから、帰っておくれよ」といわれてしまう。

参考文献:洒落倒し江戸300(富岳舎 広目屋隆助著) 落語に花咲く仏教(朝日新聞出版 釈徹宗著)  
落語日和(山川出版社 落語日和編集委員会編) 落語修行時代(山川出版社 湯島で落語の会編)  
落語でブッダ(NHK テレビテキスト) サライ(2015年9月号) もう一度学びたい落語のすべて(西東社 大友浩監修)